

第2回 乳幼児期の教育・保育のあり方検討委員会 会議録要旨

開催日時 令和3年1月26日（火曜日）18時30分から20時30分まで
開催場所 世田谷区役所第1庁舎5階 庁議室
出席者 ○渡部教育長、浅野委員長、知久副委員長、○篠原委員、○宮崎委員、
○無藤委員、○山下委員、○大久保委員、○坂田委員、○谷本委員、
○寺村委員、柄木田委員、池田委員、山本委員、大澤委員、中西委員、
本田委員、北村委員、毛利委員、隅田委員、山路委員、鎮目アドバイザー
※委員21名中20名出席
※○印の出席者はオンラインで参加

1 挨拶（教育長）

（大久保委員、坂田委員 自己紹介）

2 「（仮称）スタンダードカリキュラム」（骨子イメージ）等について（資料1）

- ・資料1について、事務局より説明

3 無藤委員より発表

- ・乳幼児期の発達の捉え方：近年の発達研究に基づく（資料2-1）

（資料2-1 スライド1）

乳幼児期の発達のとらえ方については、発達心理学や脳神経科学等で研究されており、数十年前の研究と同じところは同じだが、新しくなった部分もある。そのあたりについて、特にこの20年くらいの研究のポイントを、なるべく分かりやすく紹介した資料である。

（スライド2）

乳幼児期の発達の概要について、申し上げたいことを箇条書きにした。

- ・親子関係の愛着が重要だというのは保育指針にしっかり書いてあるが、そういう愛着というものは保育者と子どもの関係にも広がっていくものである。
- ・生理学・生物学の研究が進み、遺伝的影響、胎内環境の影響が強いことが分かってきている。
- ・個人差というと知的な知能などの個人差もちろんあるが、乳幼児期は性格のもとになる生物学的個人差である気質の差が大きく出てくる。
- ・そういうこともあり、4～50年前の発達の記述に比べると発達の筋道の幅が大きい、一人ひとり違うことが分かってきた。もちろん3歳児と5歳児は違うわけで、3歳で5歳のような子はいないので、その年齢の時期の共通性はある。保育指針で細かい年齢記述を外し、おおざっぱにしたのはこうしたことを受けてのものだろう。
- ・知的な発達のことを認知的発達というが、いわゆる知能の発達というより内容領域ごとの発達。顔の認識の発達は乳児期から見られ、知能と相関はなくはないが別である。

- ・おおざっぱな乳幼児期の分け方としては0～1歳、2～3歳となるが、大きな脳の変化が出てくる。細かく言い出すと0歳の時期もいくつかに分けられるが、0～1歳は主に身体的、直感的な脳の部分が働く。1歳台からはじまり、特に2～3歳に顕著になるのが表象機能。表象機能とは、外界の出来事を頭の中で表して思考して検討できるというもの。それがさらに自分は何をイメージしているか、考えているか、意図しているかの認識がしっかりできることを自覚というが、それが幼児期の終わりに顕著になって小学校に向かうと言える。
- ・最近と言ってもここ20～30年のことだが、非認知的な面の研究が進んできた。すなわち意欲とか社会性と呼ばれる部分である。その中で発達を支えるものとして、自分の気持ちをコントロールする力、これを研究者は実行機能と言うが、感情をコントロールすることと思考をコントロールすることに分けられ、両方がつながっている。感情のコントロールとは自分の感情をなだめる働きで、特に興奮や怒りをなだめる機能が重要。思考のコントロールとは自分の考えを集中させるとか切り替えるという働き。これが脳のどこで行われているかが分かってきた。一番顕著に発達が見られる時期が4～6歳であり、このことは重要な意味がある。小学校が6歳を過ぎてからというのは世界的にだいたいそうで、これを受けているのだろうと思う。
- ・同時に、幼児期の発達は生物学的な脳の発達だけではなく、2歳か3歳以降は文化や社会との関わりが大きくなってきて、その関係の中でも学んでいく。広い意味での好奇心。文化や社会を代表するのは大人あるいは年長の子どもたちであり、大人によって支えられているところの子ども集団—集団活動するかどうかではなく、みんなである場—があることが重要で、そこでいろいろ学ぶようになる。そして小学校以降になるとより集中的・自覚的・効率的になってくる。

(スライド3)

今の話を詳しくしたのが次の資料である。

- ・人間を霊長類という存在の中で見たときに、学習する能力が高い、特に他人から学ぶというところが決定的にチンパンジーなどとは違う。
- ・そのことと関連しているのが人間の子ども時代の長さ。15歳前後というのは生物全体でみると異例に長く、チンパンジーに比べると何倍かである。それは脳の大きさとか知性、柔軟性、学習能力と関連している。また、親であれそれ以外の他人であれ、大人が子どもの世話を極めて大きなエネルギーを注ぐのも人間の特徴である。
- ・そこでは組織的な学校の前の段階として、学習・文化の伝達が保障されている。それによって人類何万年の進化が起こってきた。組織的な学校の歴史は19世紀からだから、それ以前も家庭の場面や子ども同士が遊ぶ場面で学んできた。
- ・人間関係としては友達や仲間集団があるが、子育てする存在で考えたときには、まず夫婦と親、次に祖父母関係。特に祖母は子育てを離れても、元気な間は子どもの世話をする傾向がある。第三にアロペアレンディング、仮親と訳す場合があるが、血縁関係がなくても世話をする傾向があるということ。血縁関係がある親だけが子どもの世話をするというのは歴史的には極めて特殊な社会で成り立つことである。

(スライド4)

- ・乳幼児期にどのような学びが成り立っているかという、自分で何かをしたことによって色々なことが起きるフィードバックから学ぶこともあるが、同時に他の人を見て学ぶ、言うことを聞いて学ぶこともある。大人同士が話していることを子どもが聞いて、そこから学ぶこともある。
- ・つまり模倣が非常に重要だが、模倣とは単に動作の真似をすることではなく、なぜその動きを大人がするかを考えて学んでいる。これが0歳の終わり頃、9か月か10か月頃に顕著に出てくる。そのようにしてさまざまな物事の因果関係を乳幼児期に学んでいく。
- ・学習を「利用」と「探索」に分けると分かりやすい。何かをしたいのでそのために情報を探して使うのが利用。目的はないが好奇心で学ぶのが探索。探索が特に乳幼児期に大きい。

(スライド5)

- ・乳幼児は他人の発言からよく学ぶ。これらは研究がベースにある話だが、見知らぬ大人よりは親しい人、権威のある人から学ぶ。
- ・物語世界は物語として楽しむのであって、事実と思いつくことはないが、そこからも影響を受ける。
- ・概ね3歳頃になると、子どもはたくさんの質問をする、知りたいことを要求する。
- ・いろいろな会話ややり取りに参加し、社会的スキル、社交的スキルを学んでいく。
- ・遊びは様々なことを探索する、柔軟にやれるようになることを助ける。
- ・ごっこ遊びや見立て遊びは別の世界の可能性を考える能力と関わっている。
- ・結果は関係なく、幅広くでたらめでもいいからやってみると中にはヒットすることもある。
- ・特に大事なのがガイド（導き）付きの遊びで、専門用語では「足場かけ」という。

(スライド6)

- ・小学校では学ぶべきことがあって、それをしっかり覚え使えるようにするため、確実に段階を踏んで学んでいく。これを専門用語で完全習得学習という。それに対して乳幼児期の基本的な学習の仕方は発見学習で、探索に重点があるのであって、一つのステップが終わったら次に行くのではなく、手当たり次第にあちこちに行きながら少しずつ分かっていく。
- ・そういう意味では小学校ではしっかりと学ぶ必要があるが、幼児期では自然な学習能力を高めることが重要になる。例えば小学校では計算を学ぶが、4～5歳の子どももある種の計算をする。筆算ではなく指とかおはじきだが、そうした直感的な数学の理解があるわけで、それをベースにしながら小学校の算数に進んでいく。
- ・学齢前の子どもは色々なことを柔軟に学ぶ。否定的に言えば気が散りやすいということだが、小学校くらいになると注意力をコントロールして集中的に学べるようになる。

(スライド7)

- ・仲間集団の役割についての研究。社会性の発達、協同性の発達、道徳性の発達という

いろな言い方がある。

- ・第1段階は個人の意図性が分かっていく段階。そもそも人間には利他性があるが、困っていると分かったら困っている人を助ける。
- ・そこから次第に相手の意図を理解するようになるのが2番目。一対一の相手の見方・意図を理解していく。ある人たちは二人称的道德性と呼んでいる。次第に公正さ—公正というのは報酬をもらった時に自分と相手に平等に分けるとか、困っている人に余分に渡すとか—の配慮が働く。これを社会的自己制御と呼んだりする。
- ・3番目が集団的意図性。皆が守るべきルール、集団規範の理解が3～6歳に成立していく。ここに集団教育としての幼児教育のベースがある。その前の段階は0歳の後半から2～3歳だが、基本的には1対1がベースになるだろうと考えられる。

(スライド8)

- ・自分をコントロールする力は、赤ちゃんの時期から始まって思春期過ぎまで長く発達するが、最近の研究では4～5歳の時期の発達が顕著だと言われている。OECDで非認知スキル、社会情動的スキルと呼んだりしているが、他者とうまく付き合う能力、自分の感情を管理する能力、目標を達成する能力などいくつかに分類される。
- ・実行機能が重要。これは単に我慢するのではなく、目標を達成するために自分の行為を抑える、切り替えること。例えば道路を挟んで友達がいた時に、飛び出していくのは危ないので横断歩道まで行って信号を守って行くという時。欲求がすぐにはかなえられなくても、判断して我慢して目標は達成できる。回り道をする力といえる。
- ・感情の実行機能とは、カッとしたり喜びが過ぎたりすることをコントロールして目標を達成する力。
- ・思考の実行機能とは、つついいうっかりとか思い込みを、場面によって変えていく力。年長児だとお集まりの時間に切り替えられるようになる。小学校は休み時間と授業とをパッと切り替えられるが、そういうもののベースになる。

・新しい時代における保育者の資質向上の方策を考える（資料2-2）

(資料2-2 スライド1～3)

文部科学省や厚生労働省が保育の質の向上を検討しており、中心となる保育者の資質向上の問題をめぐって、ここ2～3年の様々な施策を簡単に整理した資料である。

冒頭は幼児教育・保育の現況を踏まえて、教育の働きがいろいろな意味で重要になってきていることを私なりに整理した。

(スライド4)

研修の問題。

- ・集合研修をどう良いものにしていくか。この1年リモートが増えてきたがそれらをどう組み合わせしていくのか。
- ・いかに全員が参加できるようにしていくか。保育士のキャリアアップ研修から差し迫った問題になってきた。
- ・往還型の研修。研修で学んだことと、それぞれの先生が実際に保育することのつなが

りを図るように、ぐるぐる回りの形を取る。

- ・ワークショップ型とは、講演・講義だけではなく、実技との組み合わせを考えようという話。

(スライド5)

マネジメントの問題。

- ・園としてのマネジメントの確立は、考えている園長は常に考えているが、カリキュラムマネジメントとは園長が管理職としてやるだけではなく、担任を含めたすべての職員がそれぞれマネジメントしていくという考えでもある。ということは、それぞれの職員の自由度、創意の余地がなければ意味がないので、それをどう広げていくか。
- ・各担任にクラスを任せるには違いないが、チームとしての保育の在り方、保育者・職員同士の情報の交換・共有、話し合いをどうしていくか。
- ・リーダーシップの分散的推進とは、管理職だけでなくそれぞれの職員もある程度のリーダーシップを担うこと。
- ・さらに保護者との関係に広げて共有していくこと。
- ・外部への研修の参加をどのように広げていくか。単に勉強するだけでなく、評価を進めながら保育の改善に生かしていく。
- ・ここ数年、働き方改革と保育の質の向上との両立をどうしていくかという、大きなマネジメントの課題が出てきている。

(スライド6)

園内研修や保育ドキュメンテーションの有効性。

- ・そのためには保育の記録や共有や討議を可能にする時間が確保されなければいけない。これをノンコンタクトタイムとも呼ぶが、1日15分でもよい、マネジメント上は大変だが、できれば30分取れないかという話。
- ・保育の記録を取って職員で共有し、ただ知るだけでなく話し合っって保育の改善につなげる。
- ・そのためには記録は簡単で、誰でも出来るものにしていく必要がある。
- ・記録を保護者や子どもたちと共有できるようにする。最近は写真を使うやり方が広がってきている。

(スライド7・8)

- ・写真による記録は、気楽に撮っていきながら、子どもたちがしている意味を考えていき、それを通して保育者のセンスを養っていく。
- ・一人でやるだけでは辛くなるので、他の保育者と共有していく。共有とは誰かに教わる面だけでなく、たとえ新任であろうと経験が少ない保育者であろうと自分なりの捉え方をするので、一つの正解を求めるよりは多面的な見解を深めていくことが重要。
- ・それをもとに、保育を良くしていくとか次の保育の手立てを考えていくことが必要。
- ・今日から明日・今週・来週ではなく、今月・来月という長い育ちの見通しへつなげる。
- ・子どもはこうだよねというだけでなく、それに対してどう保育として働きかければよいのかとか、環境設定すればよいのかとか、いやむしろ見守ろうとかを考えていく。

(スライド9)

- ・記録を取って子どもたちにもそれを見せて、子どもたちと共有し、子どもたちの思いや感じ方を引き出していく。
- ・それによって子どもたちが自分なりに考える、計画する、振り返る、そういう力が育っていけるだろう。子どもの主体性とよくいわれるが、それを育てるためには子どもたち自身がどう考えるかを大切にしたい。

(スライド10)

- ・幼稚園・保育園・認定こども園が、保護者とともに、家庭での子育てとつながっていくことが大事。
- ・これまで、園での様子を知ってもらい、保護者に安心してもらえるように情報発信してきたと思うが、もう少し踏み込んで、園は子どもを預かるだけでなく、遊んでいてもそこに学びが起る、育ちが生まれていくことを具体的に分かるようにして、保護者からの発信も可能にしながら、園と保護者とのつながりを確保していく。

(スライド11)

最後にICTの問題に触れておく。

- ・こうしたことをやっていると大変で時間が足りない。そこにICTを導入することによって、より簡便で、誰もが可能になっていく。
- ・単に記録を取るだけでなく、要領・指針でいう「育みたい資質・能力」や「10の姿」の読み取りも可能にしていく必要がある。
- ・ICTと記録を、保育の振り返りに使うとともにマネジメントにも使うことが必要。

4 乳幼児期の教育・保育の現場における幼稚園教育要領等の改訂・改定などを踏まえた教育・保育の実践について

(1) 大久保委員発表

私どもの園は3～5歳児まで188名の園児が通っている。各学年2クラス、合計6クラスの編成。創立して83年になる。幼稚園の立場として日頃感じていること、考えていることや実践していることを3点お話ししたい。

一点目は愛着の関係、アタッチメントが保育をはじめの上で大事なポイントだと考えている。入園前の親子の関係、そして親子と私たちがどういう関係を作って3年間生活したらよいかを考えている。愛着の関係というのは、新教育要領の3つの柱の「学びに向かう人間性」の基礎にあたると考えている。入園前の成育歴、家庭環境、発達の様子を理解し把握に努めている。

昨今、保育所から幼稚園に入園する方も増えていると感じる。それには学校教育を受けたい、幼稚園は学校教育だからという保護者の考えがあるようだが、子どもにしてみると慣れた保育園での生活や先生との信頼関係、友達関係があったものが幼稚園という大きな場所が変わるので、環境に馴染むのに時間がかかる子もいる。

家庭環境を見てみると、アタッチメントが弱く子どもが不安定になったり、子育てに自信が持てない不安な保護者もいる。そうした保護者の中に私など経験ある職員が入っ

て、悩みを聞いたり不安を共有して、安心して幼稚園に通ってもらえるよう努めている。

真の保護者支援とは何なんだろうと感じる。待機児童の問題があり、国でも保育の受け皿を広げていく新たなプランが立ち上がったが、長時間子どもと親を引き離すのは、離れれば離れるほどに愛着の形成に問題や支障をきたすのではと危惧するところもある。世田谷区でも子育てステーションとか集いの場とか遊びの場がいろいろあるが、利用状況がどうなっているのか知りたい。

二つ目は、環境を通した保育・教育を意識している。「子どもは環境を通して育つ」ということを教師は大切にしている。無償化に伴って幼児教育への関心が高まり、公的資金も投入されているので、質の高い教育・保育に対するエビデンスを示していく大きな責任があると感じている。無藤先生がおっしゃっていたように、教育の質とは教師の質であると思う。教師や保育者の資質、子どもへの共感性や応答性、心豊かに子どもたちと関わって成長を導くことができるのかということが大事だと思う。

先ほど研修の話も出ていたが、幼稚園には全日本私立幼稚園幼児教育研究機構という組織がある。そこでは「ECEQ® (Early Childhood Education Quality System) = 公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」がある。公開保育したい園にコーディネーターの先生が付いて、自園の強みとか弱みとか課題とかを、皆で出し合って行う学び合い型の公開保育、これが非常に大事だという話が出ている。全国で参加している幼稚園がたくさんあるが、東京では今のところ13園で、世田谷区はゼロ。私も取り組もうと思っているが、今年はコロナで公開保育に至らず棚上げになってしまった。挑戦をして、やっていくことによって質を上げていく必要があると考えている。

最後に「10の姿」について、到達目標より方向性を示すものとしてとらえている。それに向かって子どもたちの意欲を育めるような保育の環境づくりや、子どもたちの力を引き出していく教育活動の実践に努めている。

(2) 坂田委員発表

私どもがどのような取り組みや工夫をしているのか、実践例としてエピソードを挙げながら伝えたい。

私たちは指針にある3つの視点と10の姿を想定して、0歳から教育が始まっていると考えている。そして、子どもたちの身体的・精神的・社会的な発達の基盤と「育みたい資質・能力」を培うには、子どもが主体となって生活と学びを得る環境を保育者がいかに整えていけるかだと考えており、子どもが主体となる保育を展開している。

まず子どもの理解を基盤とする取り組みとして、子どもがどのように育ちたいのか、何を学びたいのかをまずは理解し、その上でその気持ちに答えることを大切にしている。私どもの園では2歳児くらいから、行事の内容を子どもたちと話し合っていて進めている。ただ意見を聞いて進めるだけでなく、必ず遊び終わった後に振り返りをして、次につなげていくことを大切にしている。

日常の遊びは子どもたちが発信するものを取り上げて進め、活動をすべて子どもたちが考えるという形を取っている。最近4歳児であった事例として、保護者の影響でマイ

ケル・ジャクソンにはまった子どもがコンサートをしたいと相談してきたことをきっかけに、保育者はそれを推し進めて準備し、ある時に園庭でゲリラライブを行った。それを鑑賞していた子どもたちが感化されて、5名のマイケルと、女の子も違うことをしたいとプリキュアも生まれて、10名がコンサートを企画しながら進めていくことになった。マイケル班は2月に大規模コンサートを開くことを目的に、ダンスレッスンや、自分たちでチケットを作って集客するという遊びを行っている。

行事に関しても同じように進めていて、基本的には子どもたちが話し合って中身を考えていく。そのため行事が例年通りにはならず、グループごとに年間行事予定が組まれていくこともある。

最近はお泊り保育を行わない保育園が増えているが、当園では毎年やりたいことを詰め込んだ内容で行っている。平成31年度と令和元年度は参加できない子どもがいたので、「もう一度やるかどうかは保育者が先導せず、子どもたちからもう一度やりたいという声が出てきたらやりましょう」という話をしたところ、子どもたちから「休んだ子どもたちにも味あわせてあげたい」という要望が出てきて、2度目のお泊り保育を行った。

保育所における評価は自己評価の面が強くなってしまい、評価の中心にある子どもたちの評価が反映されていない現状があると思っている。そのため、子どもたち自身が自分が受けた保育を評価する取り組みとして、振り返りを行っている。具体的には、園内で自分たちが反映させた意見で始まった遊びに対して、その遊びはどうだったのかを話し合うことや、遊んでいる中で子どもたちが発信する、「これは楽しかった」とか「もっとこうしてほしい」という言葉を評価として汲み取りながら、次につなげていくことを心掛けている。

保育者の主体性についても大切にしていることがある。保育者の独りよがりにならないよう注意をし、保育者も主体的に保育に関わり楽しむことを進めている。保育士は子どもと関わることを生業としているので、子どもたちに主体的に関わってくださいと言えば比較的できるのだが、間接処遇といわれる調理員にも同じように楽しんでもらえるような取り組みも、いかにして進めていくかを考えて工夫している。ある時、厨房からメニューに載せる醤油ラーメンのだしは何がいいのか、鶏がらにすべきか、鰹節にすべきか相談を受けた。「それは子どもたちが決めるのがいいのでは」と返したところ、醤油ラーメンの食べ比べ大会が行われ、結果的に鰹節のだしのラーメンがメニューに載ることになった。こうしたことを他にもやってほしいと言ったところ、調理員側も新メニューの開発へのモチベーションが上がり、新しく開発したメニューを子どもたちに食べてもらって選んでもらうという形を取っている。

環境を通して工夫していることだが、子どもたちの心と体がバランスよく育っているか疑問を感じるころがある。特に体の育ちについて発達が促されていないと感じている。私どもの園は、本園は園庭があるが分園は園庭がない。違った環境で育った同年齢の子どもたちの行動を比較すると違いが顕著になった。体の発達でスポットが当たりやすいのは身体機能面の発達だが、発達した身体機能面も使いこなせないという意味がないと

考えている。身体を巧みに使いこなすためのコーディネーション能力、運動神経能力をいかに培うかが大切だ。神経系の発達には環境の変化が必要不可欠で、プログラムされたトレーニングも10～15分で変化を与えなければいけないとなっている。ではどう工夫していけばいいのか、一番適しているのは自然の中で過ごすことだと考えている。自然は絶え間なく変化していくので、その中で過ごす子どもたちは神経系の発達がよりよく促されていく。

これを踏まえて、本園の園庭は意図的に雑草が生えたら生やしっぱなし、子どもたちが穴を開けたら開けっぱなしにして、絶えず園庭が変化する形をとっている。そうした環境の中で過ごした本園の子どもと、園庭のない分園の子どもとの分かりやすい差が、危険回避の行動の違いに表れている。2歳児の比較だが、本園の園庭に分園の2歳児が来ると、分園の子は目の前に穴とか雑草といった障害物があると、一瞬止まってから直接視野で回避行動を取るが、本園の子は同じように障害物を発見しても間接視野で確認して止まることなく回避する。分園の2歳児の行動は、本園の1歳児の行動と重なる。また、転倒した際にも差があり、分園の子は口や鼻など顔を打つことが多いが、本園の子は顔ではなく、ひじや手を擦りむくことが多い。高い場所からの飛び降りにも差があり、本園の子は自分の能力と高さを判断して飛べる範囲から始めて、成功すればより高いところに変えていくのだが、分園の子はいきなり高いところから飛び降りてしまう。

このように、体の発達を正しく促すための環境だけを取り上げて、いろいろと知識・技能の基礎、思考力や判断力、表現力の基礎といったものが育っていると感じている。

子どもの視点に立った教育・保育のあり方に関して、色々と学ばせていただきたい。

(3) 柄木田委員発表

豪徳寺保育園は平成31年に梅丘保育園と統合し、1～5歳で130人の子どもを預かっている園となった。北沢地域の医療的ケア児を受け入れる指定園として運営している。新たな保育指針を軸にした保育として、当園で大切にしていることをお伝えしたい。

入園の際に、保護者と園が協力して子どもを育てていくことを伝えて共有している。区の保育理念・保育方針をもとに、各園で保育計画を立てており、「保育の質ガイドライン」をもとに日々の保育に当たっている。子どもの資質・能力を高めていくために、乳児期から一人ひとりに丁寧に関わっていくことを一番に考えて、保育士の関わり方や、子どもたちが過ごす場所・ヒト・モノの保育環境全てにおいて園内研修を行い、日々勉強しながら保育を進めている。

幼い頃の経験は大切だと考え、自分の気持ちを外に発信することや、お互いに主張し合うこと、子どもたちが群れて遊ぶ中でぶつかり合うこともたくさん経験できるように、我慢する気持ちや、「ごめんね」と言える気持ちなどが育っていくことを重視した環境づくりを保育者が意識している。そして、小さいクラスから一人ひとりが元気に過ごせるよう、「挨拶は気持ちよく」を心掛けている。

自分の命を守っていくためには自分の体は自分で支えられるようになるという点を意識して、園庭やロフトの設計をした。園庭には鉄棒とクライミングポールとのぼり棒、

ロフトにもものぼり棒を設置している。毎日のぼり棒に登ることで、室内にあるのぼり棒で全員2か月で昇り降りできるようになった。

園庭は土で作っている。水を運んだり、泥団子を作ったりと様々な遊びができるように、砂だけのところ、泥のところ、泥と砂を混ぜたところとエリアを分けて、子どもたちが日々土に触れて遊んでいる。

一日の中で、子どもがやりたいと思うことを自ら選び没頭して遊ぶ主体性を重んじる時間と、保育者側が意図して経験させたい活動に子どもが自主的に参加できる時間を設けている。

1～2歳は天気のいい日はほぼ毎日、少人数に分かれてお散歩に出かけている。暑さや寒さを感じながら、歩く、走る、ジャンプする、ぶら下がるなど、外でたくさんの経験をさせる。1歳児でも往復で1.5kmくらい歩けるようになってきており、友達と手をつないで離れないで行くとか、ここは危ないとかを体感している。こうしたことで、病気欠席をする子がほとんどいないような状態になってきている。

陽の暖かさや心地よい風の体感、暑いね、寒いね、汗かいたね、走ったら暖かいね、といった感覚を言葉で表現したり、保育士が言ったことを自ら言ってみたりと、子ども自身が自然を体感することを重視している。日々散歩に出かけているので、花のことや、虫が出てきたとか、今はいないねとか、今日は猫が寝ていて暖かそうだとか、そういった自然物に気が付いたり触れたり感じたりする心が育っていると思う。

こうした毎日の経験の積み重ねが、子どもの主体的で対話的で深い学びにつながっていくと考えている。

幼児クラスでは、「10の姿」を保育士が念頭に置いて、可能な限り子どもと相談しながら進める保育をしている。先ほど坂田先生がおっしゃっていた、バンドごっこはうちの子もやっていて、他にもミラーハウスを作ってみたりとか、スイカ祭りを企画してみたりとか、自然発生的に始まった遊びを見守りながら、必要に応じて保育士と一緒に準備をしたり、何が必要かを一緒に考えたり、発展させながら達成感が味わえるようにしている。一つの目的に向かって子どもたちが話し合ったり、力を合わせたり、そうじゃないとけんかをしてみたり、様々な役割を担いながら一つのイベントを作り上げて達成感を味わっている。

経験させたい活動もあるが、それは訓練という形にならないように、子どもたちが楽しく取り組める保育を考え、カリキュラムの中に取り入れている。縄跳びが跳べない子がいたが、いろいろな子が関わった結果、長く跳べるようになって、4歳児や3歳児もそれを見て、自分たちも同じようになりたいと話す姿も見られている。

普段の生活環境の中に、物を作りたくなる要素、素材が置ける場所を設定している。子どもと日々相談して環境を変えており、頭と体を真剣に使う生活を心掛けている。また、その遊びをまたやりたいという気持ちに答えられるように、遊びを継続できる楽しさを友達や保育者と共有できる場を設けるようにしている。

全クラスに保育環境委員を置き、委員が話し合いながら環境を整えて、子どもたちがどういう反応だったかを研修の中に取り入れたりして、次の環境設定をどうするか話し

合っている。

機械化が進み人の手で行うことが少なくなっているので、園庭に畑を作っている。土づくりから始めて野菜を作って収穫して遊ぶとか、調理活動、刻んだり匂いをかいだり、自然物の成長を身近で感じることで、科学の芽が育つと感じている。

毛糸の編み物や裁縫での衣装づくりや、武器を作ったりして盛り上がっている。園庭に緑が育つと虫が集まってくるので、小さい子が虫を手に乗せて「大きくなったね」などと虫と対話している様子も見られてきている。

職員は、常に子どもが主体的立場であること、周囲の大人と心地よい会話を日々重ねていける環境づくり、深い学びとなって蓄積されているということを意識して保育に当たっている。

区立保育園の特徴として、医療的ケアが必要な子どもや特別な配慮が必要な子どもを受け入れるなどの多様な保育の実施、地域の子育て家庭の受け入れを担っているひろば事業の開催、地域の保育園との関わりを大切にする保育ネットの中心的存在を担っている。

また、平成21年の保育指針改定を受けて、子どもの育ちを保護者と共有するツールとして「育ちの記録」を全園で発行している。これは定期的に子どもの写真と育ちを記録したものを保護者と共有した上で、保護者にも一筆書いていただいて、やり取りを繰り返して卒園時に渡している。自園内の自己評価等に使えないかと考えているが、現在は園の取り組みがまだ各々なので、今後検討の必要がある。

世田谷区の保育園は、保育の質の向上をめざして様々な職員研修にも積極的に参加している。公立47園と200近い私立園が共に参加し、互いに実践を報告したり意見交換をしたり、公私の枠を超えて学び合いの時間を大切にしている。区内にはたくさんの園があるが、各園が近隣の園とつながって、皆で世田谷の教育・保育を考えていけたらと思っている。

5 意見交換

委員 3園の発表を聞かせていただいて、実際に要領・指針の考えに基づいて進められていて素晴らしいと思った。世田谷の全ての園が3つの園と同じ取り組みをしているなら区が何かを示す必要はないが、いろいろな事情があり、必ずしもそうもいかない部分がある。そういう意味では、「基本的な方針」のような形でポイントを出す必要があるように思う。

骨子イメージに出ている「乳幼児期に大切にしたいポイント」はまさにその通り。それをもう少し補足する文章として、私の話や要領・指針に書いてあること、今日の園長先生の話などを踏まえて書き加えられるとよいが、あまり長文でないほうがよいと思っている。それとともに実践事例が加わっていくとよいので、「基本的な方針」として示すのであれば、それとは別の付録や別冊として、同時に出すかは分からないが欲しいと思った。

もう一つ配慮が必要だと思ったのは、先ほど分園には園庭がないという話があっ

た。園庭がないとだめということではないので工夫次第だと思うが、世田谷区には様々な園としての環境のあり方があって、家庭環境も様々で、そういった多様性に配慮しないで大上段にこうすべきと言っても、うちではできないというところも出てくるので、多様性に配慮しながら、それぞれの園が、それぞれのあり方に即しながら、自分たちの保育をよくする方向が見えてくるようなものになることを期待している。

委員 骨子案の「ねらい」から、大きく2つのことがあるととらえた。1つは地域の実態や子どもの実情、私立園には建学の精神があるので、それぞれの実態に応じた特色ある取組みは保障していかなければならない。そのうえで、区として共通にどの園でも大切にしたい保育の視点、ポイントということになるのかなと思った。2つ目は「ねらい」の中にも書いてあるように研修の充実が大事。それらを実現していくためには、園で研修をどのようにしていくのか、公開保育のやり方であったり、大規模小規模の園があるので、研修の仕方をポイントとして示せるとよい。この2つのポイントから作っていくことが大事かなと思う。

内容について、研修の視点が薄い気がする。建学の精神や地域の実態に応じて行われる特色ある教育課程を大切にしつつも、区として大切にしたい保育実践上のポイントと、それを担保するための研修を園でどうしていけばよいのかを提案することで、それぞれの園がそれらを参考にして、一層特色ある世田谷の教育を展開できればよいという感想を持った。

委員 前回の会議で、誤解を招くような言葉がいくつかあるのではないかと提案したが、それに対して基本に立ち戻ろうとなって、皆で共有したいことを押さえていただいたことを感謝している。無藤先生の話をもとめて、改めて大切なポイントを確認できた。それを踏まえながら、区の教育のポイントをこの指針の中にどう入れ込むのかがとても重要になってくると思っている。

骨子案の中で、「乳幼児期に大切にしたいポイント」は学術的に大切なこと、国の指針・要領にある大切なことが位置付けられてくるのだろうと考えている。

「実践の視点」は、まさに3園に話していただいたようなことを、踏み込んでいきながら、かつ羅列するだけでなく、また指針や要領と同じことが書かれるのでは何も意味がないのだろうと思う。

そこで考えたこととして、区で一番直近に出ているのが「第2次世田谷区教育ビジョン」、そこに4つの「育てたい子ども像」が書かれている。この4つの子ども像に合わせながら、「実践の視点」について、低年齢の子どもにはこういうことと結び付くのでは、3歳以上の子どもにはこういうように結び付くのでは、とまとめていくのも一つかなと。指針改定を踏まえて、義務教育までの一貫的な乳幼児期の育ちを考えるのならば、教育ビジョンの4つの子ども像をとらえながら骨子を組み立てていき、そこに3園の実践をうまく並べていくのがいいのかなと感じた。

ただ、4つの子ども像は、長い言葉で書かれているので難しい。それを幼児期に

どう結び付けるかとなると、4つの子ども像を乳幼児期の子どもの姿に映せるような言葉を代替にもってきて、それに結び付けられる実践を各園から集めていき、こういうことが大切ですよねということを含んだ実践が入ったものが「実践の視点」になり、もっといっぱいありますよというカタログ的なものは無藤先生がおっしゃるように別資料があるのも素敵だろうなと思った。

今日の議題である骨子に対して思うこととしては、「スタンダードカリキュラム」を日本語的に分かりやすい言葉にすると同時に、世田谷区だからこそ指針と同じような解説を書くべきではないと思ったので、その根拠をどこにもっていくのかをしっかりとしなければいけないと感じた。

「外国籍や海外から帰国した子ども」と書かれているが、この表現だけでは足りなくて、父か母のどちらかが外国の方で、外国の文化を背負った子どももいる。文部科学省では「外国にルーツがある子ども」とか「外国につながるのある子ども」とも書かれていると思うので、それを盛り込まなければならない。

無藤先生にもお伺いしたいのだが、乳幼児期は外国籍の子どもも保育園・幼稚園に入るが、小学校以上の義務教育では、国がようやく動き始めたものの、外国籍の子どもの教育を推進する施策はあまり強く出てきていなくて、外国籍の子どもの6人に1人は学校に行っていないという事実もある。乳幼児期には外国籍の子どもたちの情報が集約される一方で、小学校や中学校に進むと文化の違いに戸惑ったり、言葉の違いで学習に付いていけなくなったりと、いろいろな問題が出てくる。そうした子どもたちへの対応も含めた見通しを持つために、外国籍の子どもとその家族への支援も、教育のビジョンとして大切になるだろう。「特別な配慮を必要とする子どもの教育・保育」の中身はもう少し整理が必要だと感じた。

委員 外国籍を含めた広い意味での外国にルーツがある子どもと、その家庭への支援の問題は以前から議論されているが、数年前の中央教育審議会答申を踏まえ、大きくとらえられるようになってきた。ここ最近「個別的」という言葉がいろいろなところで出てきているが、中心となる発達障害の子どもとともに、外国にルーツがある子どもの問題も含まれる。

文部科学省もいろいろ考えており、義務教育レベルでは職員配置に予算を付けてきている。外国籍の子どもは義務教育としての就学義務があるわけではないが、来てほしいというところで、自治体の努力に依存せざるを得ない。また、日本社会の問題や本人自身の問題もある。間もなく母国に帰る子どもや、外国系の学校など日本の学校教育としての学校ではない、広い意味での教育施設に通っている子どももいるので、国としての把握は困難がある。世田谷区など自治体では、教育委員会としてどう把握するかを、福祉部局と一緒にあって乳幼児からとらえる必要があるように思う。

委員 ありがとうございます。

委員長 第2次世田谷区教育ビジョンの「4つの子ども像」は、次のとおり。

○ひとの喜びを自分の喜びとし、ひとの悲しみを自分の悲しみとすることのでき

る子ども

- 生きることを深く愛し、理想をもち、自らを高めようとする志をもつ子ども
- 日本の美しい風土によってはぐくまれ伝えられてきた日本の情操や、文化・伝統を大切に継承する子ども
- 深く考え、自分を表現することができ、多様な文化や言語の国際社会で、世界の人々と共に生きることのできる子ども

委員 3人の先生方の発表を聞いて、世田谷区の教育・保育がこのような素晴らしい実践ばかりだとよいと思った。

骨子の案を見た時に、もっともなことが「ねらい」の中に書いてあるが、物足りなさを感じた。それは世田谷区らしさがないということ。「ねらい」の中に世田谷区らしさを出したほうがよい。

区全体で教育の質を上げていくためには乳幼児期から重要であり、乳幼児期から子どもたち一人ひとりの良さや可能性を引き出しながら、区が持っている教育財産・環境・人材を含めながら子どもを育てていき、それを小学校につなげていく、それが「せたがや11+（イレブンプラス）」として示されている。そうしたことが「ねらい」の中に埋め込まれていたほうが、なぜこの（仮称）スタンダードカリキュラムが必要なかが伝わりやすいのではと感じた。

「乳幼児期に大切にしたいポイント」の中で、「環境を通した教育・保育」とあるが、幼稚園で考える「環境」と保育園で考えている「環境」が微妙に違うのを、いろいろな現場を見る中で感じている。もう少し踏み込んで丁寧に書かれる必要があるだろう。

「子ども一人ひとりに対する理解を基盤とする」では、この「理解」は、行動に現れる理解ではなく内面の理解が大切。

「育みたい資質・能力」のところでは、ドキュメンテーションを生かしながらという点についての解説が必要だと思った。

それから先ほどお話しが出ていたが、私も研修の視点が薄いと感じた。保育の質を上げていくためには、保育者自身の研修、園内研修、そして地域の研修も大切。世田谷区には保育ネットがあると聞いたが、今後は公私を問わず幼稚園・保育所の関係ができるものが作られることが大事になってくると思う。

「実践の視点」については、「環境の構成」を、先生方の意見を踏まえながらももう少し丁寧に書くことが必要だろう。

また、幼児教育と小学校教育との接続の話は今日は出てこなかったが、このカリキュラムを作る意味でもあるので、具体的事例は必ず必要になってくるだろう。

「家庭との連携」のところで、無藤先生からドキュメンテーションの話が出てきたが、これはとても大事なこと。私が関わっているいくつかの園では、ドキュメンテーションやポートフォリオの活用を研究している。

そして、未来を見通した実践を入れていくことが、今回の骨子を示していく中で重要になってくると思う。例えば地域に開かれた教育・保育、社会に開かれた教

育課程が今回の改訂で言われているが、なかなか開いていないのが実情。今どういう実践をしていったらいいのかを、5年先、10年先の未来を考えながら「実践の視点」として書き加えていく必要があるのではないかと思います。

委員 骨子イメージの「乳幼児期に大切にしたいポイント」の中に「主体性」という言葉が出ているが、分かったような、分かっていないような形で実際の園の中では使われていくことが多いように思う。子どもたちの主体性を生かしているとはどういうことなのか、きちんと定義しなければいけないと思っている。環境構成も具体的な形で記していけないと、現場ではやっていると思ってしまう。子どもたちが自分で選べる、自分で決められる環境を作っていかなければならないと思うので、こうした部分をできるだけ詳しくしていただけると、現場で役に立つものになるのではないかと。

小学校との接続については、実際にはなかなか難しく、小学校の先生方が保育園・幼稚園の事をどこまでご存じなのか疑問がある。小学校の先生方に伝わっていないと、接続がうまくできないのではと思っている。

「家庭との連携」と「地域に開かれた教育・保育」はほぼ一体だと思う。指針にはしっかりと書かれているが、家庭や地域に伝わっていない現実がある。例えば体罰禁止が法律で決まったが、実際には保育園で職員がいくらやめても、家や地域に帰ると子どもたちが体罰を受けている、行ったり来たりというのが現実だ。幼稚園・保育園でなされている内容をどう家庭や地域に広めるかということも、連携という言葉の中に含めていただけるとありがたい。

そして、名称は最後に決めるのが一番いいのではと思っている。

委員 小学校と幼稚園教育はつながっている、教育ビジョンは幼稚園・小学校・中学校とつながっていくものだとすることを改めて理解した。

世田谷の子ども像、久しぶりに聞いてドキドキしている。かつてこれを覚えていないと厳しく言われた記憶がある。また原点に立ち返るのかなと思った。

私は小学校長を兼任しているので、幼稚園の園内研修をやる時は小学校教員も全員参加で、研究会も一緒にやっている。毎月の校内研も幼稚園教員に全員参観させて、研究会にも参加させる。とにかく見て理解させることを進めている真っ最中。こうしたことが何かの役に立たないかなと思う。

今回の休業は子供たちに大きな影響を与えた。これからの指針が大切になると思う。とてもいいものを作りたいと改めて思った。

教育長 無藤先生のお話、3人の先生の発表、学識の先生や委員の皆様のご意見、どれも刺激的だった。

私はずっと小学校教員をやってきた。この職になって幼稚園を回っているが、たくさんのお話がある。先ほど「4つの子ども像」のお話をいただいたが、今は「せたがや11+」を掲げている。「11+」という名称には、3歳児保育を無視しているとか、保育園は0歳児からあるのだからとか、いろいろご意見をいただいている。イレブンから先、12、13以上は言いにくいので「+」でくくって

るが、いずれ考えていかなければいけないネーミングだと思っている。

「せたがや11+」の中で大切にしていきたいのは探究的な学び。課題を自分で見つけて、解決方法を自分で考えて試行錯誤して最終的な解決をめざしていくということ。社会には複雑な課題がたくさんあって、子どもたちは未来を切るわけだから、そうした局面に積極的に向かい合っていかなければならない。だから課題を自分で見つける探究的な学びをこれから義務教育の中でやろうと思っていたが、幼稚園を見ていて、探究的な学びの基本が乳幼児教育の中にあると気が付いた。自分で課題を見つけて、これをやりたいからどうすればいいということを考えていて、ないものは作り出そうとしている。

「せたがや11+」には探究的な学びとキャリア教育の2つのねらいがある。キャリア教育は、「無限の可能性を持った子どもたちが、未来に向けて自らの将来像を描きながら、主体となって人生の指針を作る」と定義している。つまり、なりたい自分になるために自分はどうしたらいいか考えていくということ。「せたがや11+」の大きな狙いがこの2つと考えていくと、皆さんの話が全てここに詰まっている。乳幼児期から探究的な学びができていて、それをどう小学校、中学校、高校、その先の人生につなげていくか、これを世田谷のねらいとして入れていけばよいということが分かった。

また、世田谷らしさが全くないというお話をいただいたが、その通りだ。これから世田谷らしさを追究していきたいと思った。他にも細かいご指摘をいただいて感謝している。LGBTなど多様性の視点も抜けている。私たちだけの偏った見方で進めていくと抜けてしまうので、皆で語り合っているものを作っていきたい。本日はありがとうございました。

6 その他

- ・第3回は、3月4日（木）18：30から実施予定。
- ・場所は後日お知らせさせていただく。オンラインの参加も可能。

以上